

令和2(2020)年度

日本特別活動学会 第7回 実践事例募集事業

推 奨 実 践 事 例

事例番号 7-2

個人、集団での1年の活動を通して、未来に向けての「キャリア教育」を身に付けていくための段階的な指導方法

(群馬県)伊勢崎市立殖蓮小学校

木暮 直隆(キグレ ナオタカ)

実践テーマ	個人、集団での1年の活動を通して、未来に向けての「キャリア教育」を身に付けていくための段階的な指導方法
実践区分 ○囲み	学級活動・ホームルーム活動 児童会・生徒会活動 クラブ活動 学校行事 その他(具体的に、)
実践事例の 背景、ねらい、 意義など	<p>平成29年度告示の小学校指導要領の改定により、小学校でも特別活動の中で「キャリア教育」を扱うことになった。</p> <p>〈特別活動 第2章 各活動・学校行事の目標及び内容 2内容 (3) 一人一人のキャリア形成と自己実現〉</p> <p>今年度からの取組であるため、どのように実践をしていったらよいかは学校ごとに裁量が任されており、取捨選択をしていかなければならない。私の所属する学校でも「キャリア教育」の学校での取り組み内容は決定していないため、今回は私が所属する第6学年において、「キャリア教育」の試験的実践を行なった。</p> <p>私が実践のために選んだテーマは、将来の夢につなげていくための能力である。まずは将来の夢をかなえるために必要な能力を考え、1学期、2学期、3学期と継続して意識させ、学習、生活、家庭での活動を取り組ませた。学期ごとに考えたことは、1学期は、児童個人のキャリア教育へつながる意欲や態度の育成。2学期は、集団の中での役割を果たしていく上でのキャリア教育へつながる意欲や態度の育成。3学期は、1年間キャリア教育に向けて育成してきた能力で足りない能力を考え、中学校のどのような場面で育成していくかを考えていった。</p>
実践の時期	平成・令和 2年4月～3年3月

1 実践の内容と検証方法

(1) 内容

第5学年23名の学級で、4月から3月の計13回の学級会の実践である。第1回学級会を行った後、児童と共に学級会のルーブリック作りを行い、毎回の学級会の振り返りに活用した。「出し合う」、「比べ合う」、「まとめる」の視点は教師側から提示し、第1回目の学級会における話合いの姿を振り返った。多くの児童が自分の姿だと感じる項目をB基準にし、よりよい話合いの姿について考えを出し合い、A基準を作成した。

4月作成したルーブリックは以下の通りである。

	A	B	C
発信力 (出し合う)	理由とともに自分の考えを伝えることができた。	自分の考えを伝えることができた。	事前に自分の意見をもつことができた。
友だち尊重力 (比べ合う)	友だちの考えを自分の考えと比べながら聞くことができた。	うなずいたり、あいづちを打ったりして話を聞くことができた。	友だちの方向を見て話を聞くことができた。
考えまとめ力 (まとめる)	多くの人が納得できるようなまとめ方を考えた。	すぐに多数決をとらず考えをまとめた。	多数決をして考えをまとめた。

4月作成のルーブリックを活用し、第2回学級会から第7回学級会の計6回、学級会の振り返りをした。10月中旬、国語科「よりよい学校生活のために」という単元において、話合い活動について学び、ルーブリックの評価内容を見直す授業を実践した。その結果、3つの視点全てにおいて、発展的な内容であるS基準が作られた。10月中旬に改変したルーブリックは以下の通りである。

	S	A	B	C
発信力 (出し合う)	友だちの考えに質問したり、付け加えて意見したりすることができた。	理由や根拠とともに自分の考えを伝えることができた。	自分の考えを伝えることができた。	事前に自分の意見をもつことができた。
友だち尊重力 (比べ合う)	少数意見や自分とちがう考えを聞いて話合いに生かすことができた。	友だちの考えを自分の考えと比べながら聞くことができた。	うなずいたり、あいづちを打ったりして話を聞くことができた。	友だちの方向を見て話を聞くことができた。
考えまとめ力 (まとめる)	みんなが納得できるようなまとめ方を最後まで考えた。	多くの人が納得できるようなまとめ方を考えた。	すぐに多数決をとらず考えをまとめた。	多数決をして考えをまとめた。

改変したルーブリックは、第8回学級会から第13回学級会の計6回、振り返りに活用した。

(2) 検証方法

2つの方法で実践の成果と課題を検証する。1つ目は、ルーブリック評価の結果である。第2回、7回、8回、13回の4つ結果を比較し、児童の変容を考察する。2つ目は、第13回学級会における「まとめる」場面の様子から児童の変容を考察する。

2 実践の結果と考察

(1) ルーブリック評価の結果から

表1・2・3の結果から、「出し合う」、「比べ合う」、「まとめる」の全ての視点において、よりよい評価へと人数が増加したことが分かる。表にはまとめられていない第3回から第6回、第9回から第13回においても上下の変動がありつつも、少しずつよりよい自己評価をする児童が増えていった。

第1回から第7回まで、学級会の話合いのめあては、教師側から提案していたが、評価内容を見直し、S基準を設定した第8回以降からは、計画委員会の児童が主体的になって話合いのめあてを提案するようになった。計画委員会では、『前回の学級会では、「まとめる」の場面でもう少し全員の考えを聞くべきだった。』などという内容が話し合われるようになり、学級会の各過程での大切にしたいことを教師側と共通理解できていたと考えられる。

(2) 第13回学級会の様子から

第13回の議題は、「5年生ありがとうの会を開こう」であり、1年間の友だちへの感謝の気持ちを感じながら協力できる集会活動をしたいという願いから提案された。この学級会の「まとめる」場面において、A児の発言をきっかけとし、少数意見を生かすような合意形成が見られた。比べ合う

話合いでは、各意見の心配な点を考え、その解決策について話し合った。その過程を経て、投票を行った後の場面である。ドッジボールを選んでいる4人は、フリスビーを投げるのが苦手であり、ドッジボールを

【表1 「出し合う」の結果（単位：人）】

	第2回	第7回	第8回	第13回
S評価	0	0	4	8
A評価	6	12	11	12
B評価	14	10	6	3
C評価	3	1	2	0

【表2 「比べ合う」の結果（単位：人）】

	第2回	第7回	第8回	第13回
S評価	0	0	3	8
A評価	10	11	11	12
B評価	7	10	7	3
C評価	6	2	2	0

【表3 「まとめる」の結果（単位：人）】

	第2回	第7回	第8回	第13回
S評価	0	0	7	6
A評価	7	10	10	11
B評価	13	10	6	6
C評価	3	3	0	0

【※学級会の様子（一部抜粋）】

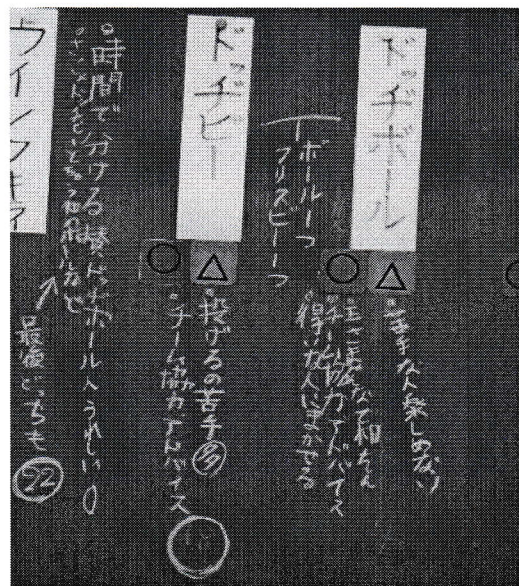
司会：多数決で、ドッジボール4人、ドッチビー18人と決定しましたが・・・。

A児：ドッチビーで使うボール、フリスビーは時間差で決めるとよい。

B児：ドッチボールを選んだ人も楽しめるように時間で分けるのは賛成です。

したいと考えていた。しかし、運動が苦手な人にとってはドッジビーの方がより楽しめるのではないかという考えが発表され、多くの児童がその考えに共感していた。そのような場面でA児がした提案は、ループリックの「まとめる」のS評価である「みんなが納得できるようなまとめ方を最後まで考えた」姿であると言える。A児の提案がされた後、A児の提案を後押しするようなB児たちの意見が出され、2つの遊びを時間差で分けてどちらも行うということで話し合いがまとまった。A児は、第12回までのループリック自己評価では、「まとめる」の項目をA評価にしていたが、この第13回の自己評価ではS評価としていた。このA児の自己評価は、教師側の評価と合致しており、A児が話し合いの「まとめる」話し合いでの成長を実感できた場面であったのではないかと考える。

〔写真 「まとめる」話し合いの板書〕



3 成果と課題

成果として挙げられるのは2点である。これまで筆者が行ってきた話し合い活動における児童の振り返りでは、「4：よくできた」、「3：まあまあできた」、「2：あまりできなかった」、「1：できなかった」という基準で各項目を児童が自己評価することがほとんどであった。このような評価方法では、児童一人一人に基準があり、目指す姿が不明確であった。また、教師と児童の間でも目指す姿を共通理解することができないという課題があった。しかし、児童の「こんな話し合いができるようになりたい。」という願いを聞きつつ、目標の姿を具体的に定めるループリック評価を取り入れることで、上記のような課題を克服することができた。また、ループリック評価を繰り返し行うことと、評価内容を見直す活動を取り入れることで、学級会の話し合いにおいて、子どもたちが自らの立ち位置を自覚し、より高い次元へ思考力・判断力・表現力を高めようとすることが示唆された。

今後の課題として、本実践は自学級のみでの実践であった。ループリック評価は、学校における特別活動の目標に応じて、全校の取組として各学年で系統性のあるもののできればより有効な取組になるのではないかと考える。

参考文献

杉田洋『小学校 新学習指導要領の展開 特別活動編』明治図書、2017年